

ふれんどしっふ

1997年3月28日 発行
郡上八幡国際友好協会 総務部

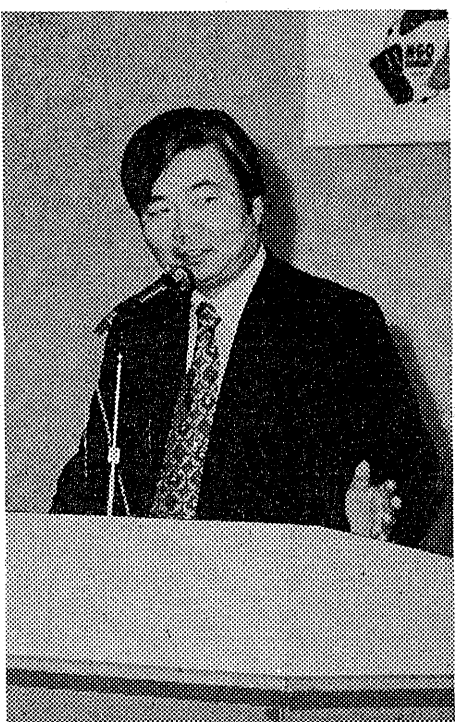
国際理解講演会を聴講して

門原 和田 正之

二月三日(日)、郡上八幡国際友好協会の主催により郡上八幡総合文化センターで、外務省の民間援助支援室長の五月女光弘さんをお招きして国際理解講演会が行われました。これは、岐阜県世界青年友の会(加藤晃会長、前岐阜大学学長)が主催したNGOサミットの一環として行われたもので、この講演会での感想文をいただきましたので紹介します。

「いのちはそれを愛そうとする者のためのものであって、傷つけよう、壊そうとする者のためのものではない」(釈尊)

支援室長の五月女光弘氏の「国際交流から国際協力へ」と題する講演を聞いた。その中で、「いのちのビザ」として有名な八百津町出身の杉原千畝さんにまつわる話がなされた。杉原千畝さんは、昭和十五年リトアニア領事館員として勤務していた当時、ナチスドイツによるユダヤ人への迫害は、はげしさを増し、ユダヤ人は迫害を逃れるためにヨーロッパ各地を転々としていた。ヨーロッパの国々に救いを求めたが、ナチスドイツの勢力を恐れた全ての国々は、彼らの受け入れを拒否した。永世中立国スイスも国境を閉鎖して受け入れなかった。ユダヤ人々は、自由の国アメリカへの渡航を求めて、海岸のあ



講演をする五月女光弘外務省民間援助支援室長(2/1大垣市で撮影)

る国からのビザ(査証)外国旅行のとき、旅行先の国に駐在する大使、公使、領事館が、旅券を正当と認めて行入国許可の裏書き証)発給をそれこそ命懸けで求めていた。既にリトアニアでも各国の大使館や領事館は閉鎖され、日本の領事館があるのみであった。ユダヤの人々は、杉原さんにビザの発給を求めて殺到した。杉原さんは彼らの旅券が失効しているのを見て、外務省へ打電し、指示をおおいだ。外務省からは、「正当で適切な判断をせよ」との返電があった。失効している旅券に、日本への入国許可証明の署名なつ印することは、正当なことではない。しかし、領事館には何千人もの人々が、必死の面持ちでビザ発給を求めてひしめいている。杉原さんは、多くの人々のいのちがかかったビザ発給に応じた。しかし、本国日本からは、領事館を閉鎖して即刻帰国せよとの命令がすでに出されていた。急がねばならない。彼は、懸命に署名しつづけた。だが、帰国のために、首都カウナスの駅へ向かわねばならない。ぎりぎりまで署名しつづけて列車に

飛び乗った。それでもビザの発給を求める人々は列車に群がった。彼は、署名しては間に合わない、通行許可の用紙を配った。それによって、六千人からのユダヤの人々はかろうじてシベリア鉄道に乗ることができ、ウラジオストクまで来ることができた。ところが二十一日間のビザの有効期間はどうに過ぎていた。しかし、日本の船は、彼らに乗せた。そして、敦賀に向かった。日本の入国審査官は、ともに失効している旅券とビザであったが、入国を許可した。そして、敦賀の人々は、六千人のユダヤの人を温かく迎え、手分けして宿を提供し、滞在中の食料などの世話をした。やがて神戸に移った彼らを見、世話をしたという。

なぜ当時の日本人が、日独伊三国同盟を結ぶドイツの意に反してユダヤ人を助けたのか。それには、日露戦争以前にさかのぼる深いわけがあった。日本はかつて戦時国債をアメリカのユダヤ金融資本に買ってもらい、日露戦争を乗り切った恩恵があったのである。したがって、ユダヤの人々に深い恩を感じていた日本は、ナチスドイツのユダヤ人迫害を許さず、昭和十三年「ユダヤ人対策要綱」を発令して、たとえ同盟国ドイツの政策であっても、ユダヤ人迫害は日本は関与しないことを世界に発信していた。当時の杉原さんをはじめ日本人が、ユダヤ人の困窮の状況に無関心でいられたのはそんな背景があったからである。

ユダヤの人たちは太平洋戦争が始まる直前に、神戸からアメリカへ無事出国することができた。無謀な戦いで敗れた日本は、悲惨な極めた。当時千三百万人の日本の子供たちの窮乏を見かねたアメリカのユダヤ人協会は、特に日本経由でアメリカへ渡った人たちを中心に、全米に呼びかけ、脱脂粉乳などの食料を日本に送った。それによって、餓死者も出さずに子供たちは育っていった。

今から十三年前、アメリカニューヨーク勤務であった五月女氏は、ユダヤ人協会会長から、杉原氏から発給されたビザによって、六千人の人たちが救われ、今ではその子孫は六万人の人数に増えたことを知らされた。「私たちユダヤ人は、杉原千畝氏をいのちの恩人として、決して忘れません。スフィンクスやピラミッドのような塔は建てません。しかし、杉原氏をはじめとする多くの日本人から受けた恩恵は、これから何世紀にも渡って必ず語り継がれていきます。それが恩に報いる唯一の道だと言えらるから」と、感謝を全身で表しておられたと話された。

関西・淡路の大震災の折にも、彼らからの義援金、援助物資は群を抜いて多かったという。かつて受けたユダヤの人からの恩を忘れないで、彼らのいのちを救った戦前の日本人。そして、日本人への恩を半世紀以上も決して忘れることなく報いてゆこうとしているユダヤの人たち。今日国際社会からの援助によって、戦後の復興を成し遂げた日本が、その恩義を忘れ、経済社会での優位さを誇示して傲慢になつてきている。今北米開教監督を勤める友人の今井亮徳君が、数年前「今日の日本人は、経済力をかさに着て、傲慢な態度が目立つ。アメリカ人の多くが日本人をアラガント(傲慢)な国民と評している」と語ったことが思い出される。国際社会への恩義を忘れたら日本は見離されていくのではないか。「稔るほど、頭を垂れる。稲穂かな」の格言を引き合いに出して、国際社会でも人間社会でも、どこまでも謙虚である姿勢の大切さは変わらないと言われた五月女氏の言葉が印象に残る。

五十数年前、杉原千畝という一人の人間が、いのちの尊厳という深い眼差しを通して、六千人の異国の人々に深い愛を注いだ。その行為は、厳しい状況下で苦悩の末の重い重い決断であつたらう。「賢慮の徳」ということばがある。事に臨んで適切な判断を導く能力のことである。杉原氏のこの尊い決断を導きえた能力とは何であつたらうか。私はその根っこに、いのちへの限りなき優しさを見る。いのちを愛そうとする彼の本当の優しさである。その彼の行為が今、六万人を越える人々のところに、わがいのちに注がれてある深い愛として感得され共感される。その共感が、深い恩として感受されるとき、それはそのまま他者への愛として注がれるのであろう。

北米教育交流事業での「こま

源氏物語とアメリカの学生たち

新栄町 石田良三

平成二年六月、第一回の学生を県庁まで迎えに行ったときの事です。彼らは、自由な服装で両手に荷物を持ってバスから降りてきました。表敬訪問のために県庁へ行き、副知事の歓迎の挨拶の後、学生たちは自己紹介を行いました。訪問を済ませて近くの食堂で日本食の弁当を食べながら、多分、日本の第一印象について話し合っているのか、英語のおしゃべりなので内容はよくは分かりません。

突然、「源氏物語」の日本語の一節が私の耳に飛び込んできました。びっくりしました。それから私は耳をそばだて、学生たちの話をじっと聞きました。が、肝心な所は、英語、それも本場の流暢な英語なので

悲しいかなよく分かりませんでした。

誠に恥ずかしいことですが、源氏物語とは主人公の光源氏が色男で多くの女性からもてはやされ、男冥利に尽きる一生を送った恋愛物語を、紫式部が上品に書いた位にしか思っています。改めて源氏物語を事典で見ますと、次のように書いてあります。

源氏物語は、事典によると平安時代の物語で、ある帝と桐壺更衣(身分の低い女官)との間に生まれた主人公、光源氏の一生とその一族たちの人生七〇年余を虚構した、紫式部の五十四帖にも及ぶ大作とあります。事典を読んでいても家系図を見ながらでないとてもややこしくて理解がで

きません。その後、私は、円地文子訳の「源氏物語」をつまみ読みし、巻末の学者や作家の解説も読みましたが、どうやら色好み論やものあはれ論などのようであります。

アメリカの学生たちが「源氏物語」を話題にしたことで、私もほんの少し勉強しました。さて、アメリカの学生たちは、「源氏物語」の何に注目したのでしょうか。また、作者の紫式部をどう評価しているのでしょうか。当時の政治のありかた、社会のありかた、あるいは美意識に興味を持ったのだろうか。一度聞きたいと思っ

ていたが、機会もなく、そのままになってしまいました。なお、事典で多分アメリカ人であろうアーサー・ウェリー

の英訳が海外で声価を高めたと思いましたが、学生たちも読んだのだろうかとも思いました。

奇しくも今年の一月の新聞に愛知県の厚生年金会館で作家の瀬戸内寂聴さんが「源氏物語」について講演されたという記事を見ました。講演では、日本が世界に誇ることが

できる文化遺産を日本人が知らないのは恥であり、せめて帖々の名前とか、登場人物の名前ぐらいは頭に入れて下さい、そうするとみなさんの生活も豊かに雅やかになると思

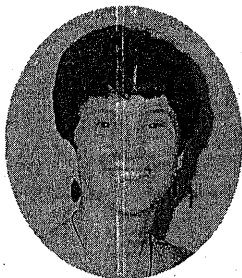
Exchange Japan

ベス・ストロプキー

子供の頃からアジア、特に日本に興味を持っていました。大学に入ってから日本の様々な美術、歴史、文化などの授業を受け、益々その興味を深

くする機会に恵まれました。日本語は大学二年の時に勉強し始めました。最初はとても楽しくチャレンジ精神で一生懸命勉強しましたが、二日程つと授業以外で日本語を使う機会があまりないため、興味

がどんどん落ちていきました。卒業が近くなり、就職するか大学院へ進むかを迷っていました。ちょうどその時Exchange Japanのポスターを見かけました。両親も薦めてくれたのでこのプログラムで



ベス・ストロプキー

(前当協会会長)

まめなかな

夏期日本語講座の卒業生で、現在は八幡町内にある英会話講師をされているベス・ストロプキーさんをご紹介させていただきます。

インド料理を 楽しむ会を開催

昨年の十一月三十日(日)、相生の社会福祉センターを会場に会員ら五十人が集まり、インド料理を楽しむ会が行われました。

講師は、京都、大阪でインド料理店などを経営しているプラモード・ジャイスワールさん。本格的な香辛料をたっぷり使い、インド料理の中から、サモサ、チキン・マサラ、サフラン・ライス、ナスカリー、ティーとラッシー



講師(写真中央)と一緒にナスカリーを作っているところ

(平成六年度受講生)